

「在日コリアン社会と祭り-大阪〈生野民族文化祭〉を中心に」

研究目的

本研究は1983年に始まり20回をもって終えた「生野民族文化祭」についてその背景にあった日本社会と在日コリアンとの関係、そして、「生野民族文化祭」が本地域及び日本社会、そして在日コリアンに与えた影響について明らかにすることを目的としている。なぜなら、これまでの在日コリアン研究は政治的な問題、社会的な問題、国際化の流れのなかでの異質な存在として扱われ、最近ではアイデンティティや生活文化に関する研究へと進んでいるが、そのなかで民族祭に関する関心も高まりつつある。ところが、日本で初めて民族祭を開催した「生野民族祭」に関する研究はほとんど行われていないといえる。本研究は、これまで見逃されていた在日コリアンの文化を介した営みを明らかにするだろう。そして、そのことを通して在日コリアンの文化活動の再構築の行方を提案できるに違いない。

具体的に本研究の着眼点について次のように考えている。

第一、「生野民族文化祭」開催に至る歴史的脈絡に関する考察。ただし、歴史的脈絡は「祭り」という文化的な媒介に着目し、在日コリアンの文化的創造と拡散のプロセスに注目する。

第二、「生野民族文化祭」が在日コリアンの内部社会に与えた影響に関する考察。すなわち「生野民族文化祭」開催によって在日コリアンの内部社会がどのように変化したのかを考察する。

第三、「生野民族文化祭」が日本社会へ与えた影響に関する考察。「生野民族文化祭」が在日コリアンの外部社会である生野地域コミュニティや日本社会にどのような影響を与え、どのような変化をもたらしたのかに注目したい。

研究方法

最初に、先行研究として民族祭に関する文献調査を行う。同時に、在日コリアンに関する既存の研究から生活史の部分再構成する。また、民族祭をテーマにした研究は多数あるが、「生野民族文化祭」をテーマにした研究は殆んどないため、「生野民族文化祭」が発行したパンフレットを通して、民族祭に参加した人たちの「声」を検討し、また、具体的に行われたプログラムも検討する。そして、当時の新聞や雑誌などで民族祭に関する報道記事を集める。

次に、インタビュー調査を行う。対象としては「生野民族文化祭」に参加した人たちと、そばで見れていた日本人や在日コリアン、そして、可能なら既存の民族団体にもインタビューしたい。記録資料があまり残っていない中で、それを補う意味でも口述資料による調査は貴重な資料となるだろう。

研究内容及びまとめ

研究内容をまとめると次のようになる。

第一、「生野民族文化祭」を在日コリアンの歴史的脈絡で捉えることにより、在日コリアンを取り巻く日本社会の変化に注目することになる。それは同時に、差別や偏見のなかで常に日本人への同化を強要されているなかで、在日コリアンたちの「声」に注目することでもある。言い換えれば、これまでの政治的抵抗から文化的抵抗へ変化した背景、日本社会の環境の変化やその関係性が明らかになるだろう。また、「生野民族文化祭」は在日コリアンの文化を日本社会に顕著化させるのに一定の役割を果たした。「生野民族祭」に関してはその後広がった〈京都東九条マダン〉、〈ワンコリアフェスティバル〉などに比べ、在日コリアンだけの閉塞的な祭りだったと既存の研究では論じられるが、果たしてそうなのか。本研究は、そのような評価への疑問から始まっている。つまり、〈京都東九条マダン〉、〈ワンコリアフェスティバル〉などの日韓の共生や日韓の理解へのモチーフの変化への過程は、それを生み出した時代を反映したものであるという観点から生野民族文化祭に関する再評価を可能性にすると考えている。

第二、「生野民族文化祭」を実行していく中で発生する在日コリアン同士の葛藤構図や連帯感の形成などの変化が見えてくるだろう。また、「生野民族文化祭」は「新たな民族アイデンティティの認識」を持つきっかけになったと評価されているが、実際に、生野民族文化祭に関わった人々の活動が、その後の経験にどのように影響を与えたのかも同時に、把握していきたいと考えている。

第三、在日コリアンが生活する日本社会の変化について考察することにより、「生野民族文化祭」が在日コリアンと地域コミュニティ・地域住民とのコミュニケーションの媒介として機能したのか。また、地域住民と交流し、協力可能な場所として役割を果たしたのか。新しい地域文化創出にどのような影響を与えたのかなどに関する関係性を把握することができると考えている。